

京童

インタビュー

思いきって色々聞いてみよう！

くわえ・ぱべっとステージ 編

答えてくれた人：つけくわえさん

インタビュアー：千蒲誠也・坂下智宏（人形劇団京芸）

作品作りについて

締め切りを作る、初日を決める。それから作品を選び、作る。作品は、頭の中にふっと絵が鮮明に浮かぶ。それは動画で主人公は大体ピンチやねん。作品のテーマは最後。例えば、ある時、丘の上で動物達が色んな事があって走ってるのを夕方に思いついて書いてたんやけど、3周目ぐらいまで書いたら夜遅くなっちゃったから、もう寝ようと思って横になったら、頭の中でもまだ走っててん！こりゃアカンと思って起き出して、また続きを書き出して、朝までに書いた。

——それは、何で走ってるかを書くんですか？

そうそう。なんで走ってんねやろう？ 走ってどうなんねやろう？っていうのは、後付で考える。そういうタイプ。

だけど、主人公の要求の強さは大事。「何のため？」を考えていく。

外部の人に演出してもらったことは無い。脚本を書くときからビジュアルが浮んでるから。文章で分からないイメージは沢山持っている。

自分の台本は、稽古の現場でプラスへマイナスと、どんどん変わっていく。プラスすることで理想に近づくタイプの役者は、そこに行けるように書き足す。そうすると自分でも新しい発見があったりする。

稽古はビデオに撮らない。客観性は要らない。一人で人形劇やる時は、段取りが命。納得するまで色々やる。公演を見てもらった子ども達の生の声を参考にしている。

稽古や脚本の段階で一度は落ち込む。「これでええんか？」「これしか出来へんの？」でも初日決まってるから「前に進むしかない！」つまづいても「いい方法は…？」と考える。常に問題意識は持ってる。すると新しいアイデアが出る。問題は何かと考えるのは、生活の一部であり習慣。

人形劇へのきっかけ

幼児の頃から人形劇が好きだった。トラックの後ろで上演されてた移動劇場の人形劇を2つ観て「本当に生きてる！」と思った。その夜、夢を見た。真っ暗な空間に色々な人形が浮かんで来て、掴んでも掴んでも掴めないという内容の夢を。

モノが命を持って動くのが好き。子どもの頃、寝ている間に人形が動くかも！と思って、枕元に人形置いていた。置いてるだけやったら動いたのが分からへんから動いたか分かるように、輪の中に入れとくねん。それで朝起きたら、動いとんねん！

—— ええ！？

でもそれは寝てる時に、手でふっ飛ばしてただけやった（笑）あと、ラジオの中にも小人がいてるんちゃうかって思った。だから、ずーっとラジオの中を隙間から覗いてた。二人ぐらいで声変えたりしてるんちゃうかって？（笑）

今の自分は、ずーっとその延長。

—— 個人的な興味で聞きますけど、よく人形使いは手に人格があるって言われて、こいつ（手）が勝手に動くっていいですけど、動きますか？

動く。（人形を）持ったら、この人（手）が動きはるねん（笑）

自分でやりたいビジュアルイメージを作るために。

自分が思ったことを自分でやりたいようにやれるから個人でやっている。

—— 失敗した話とかありますか？

歌い慣れてた歌の歌詞を忘れて、その場で即興で歌詞を作ってごまかした。一緒に出演していた北村直樹さんがびっくりして、目をパチパチさせて合図していたが、堂々としてたほうが勝ちやねん。

旅はイベントではなく日常。

旅公演のし過ぎてて、旅が生活になってる。如何に、旅に行っても自分の生活をキープできるかが大事。食事もその地域の地元のスーパーで食材を買って、ホテルで食べる。洗濯物や水の確保も同じで、旅はイベントではなく日常。風邪など体調崩すと、本当に辞めたくなる。なので観光もするけど、体調をキープするのが大事。ホテルのエアコンなどで、朝起きて声が出なくなると絶望。一番大事なのは公演やから。